
熱

福田 きな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱

【Nコード】

N5321C

【作者名】

福田 きな

【あらすじ】

私がまだ本当に小さかった頃の、Lとの思い出。私は今でもハッキリと思いだせる。大切なLとの1度きりの思い出だから。

（前書き）

私・・・とわ誰の事かわかるはずです。デスノファンなら・・・。これわDEATH NOTEのLを相手として使わせていただきましたが、まったく物語自体は作者の妄想・・・想像・・・瞑想・・・（え??？）勿論、私とはニアの事です（・・・）

私がまだ本当に小さかった頃、1度だけLに抱っこしてもらった事がある。

Lはヒョロヒョロで、でもその腕は力強くて安心した。鎖骨の浮き出た細い身体なのに、凄く強い意思とか、その天才の魂とか、色々伝わってきて、泣いてしまったのを覚えている。

漠然としていたけれど、子供心にLは凄いんだなって思った。

Lは泣いている私の顔をじっと覗き込んだ。細い腕で私を持ったまま前に出し、私をじっと見ていた。

Lの目はなんだか不思議で恐い。全てを見透かされそうで、私の事を見ているはずなのに、もっと違う何かを見ているようでもあった。

恐いけど、私はLの目が好きだった。

Lは猫背だけど、身長は多分凄く高かったと思う。180cm以上は絶対あった。

顔は、格好良くはないのだろうけど、私は好きだった。私は無条件で、Lを格好良いと思っていた。でも多分、それはいろんな意味でワイミーズハウスの子供なら皆同じ。皆Lの何所かしらを格好良いと思っていたんだ。

私はLの黒髪も好きだった。私は金髪だし、猫毛だから、Lの真直ぐな黒い髪が少し憧れだったんだ。でもLが私を抱っこして、私の金色の髪を撫でてくれた時、私は自分の髪が金色で良かったと思っただ。

Lが死んだってロジャーから聞いた時、本当は悲しかった。涙は出なかったけど、本当は大声で泣けるほど悲しかった。

ひとりで部屋に帰った後、Ｌの色々な事を思い出した。
その姿も、声も。

細い背中とか、細いのに強い腕とか、鎖骨とか。ヨレヨレの服を着ていたな。黒い髪に黒い、光のない眼をしていたな。

いつも裸足だったな。頭が良くて素敵だったな。

でも、いつもひっそりとだけ、悲しそうだった。淋しそうだった。

何より私が覚えている……というより、忘れられないものがある。

Ｌに抱っこしてもらった時に伝わってきたもの。

強い意志や魂や、それらの何より強烈に、今も私の体に覚えているもの。

ぬくもり。

Ｌは、あったかかった。

本当にあったかかった。

Ｌの胸、Ｌの腕、Ｌの手の中で、私の全てに流れ込んできたその熱さは、今も私の全ての細胞の核になっていると思う。

Ｌを尊敬する、そのハッキリとしたきっかけだ。

Ｌのぬくもりこそ、私がＬを目指す理由になる。そのくらい、Ｌはあったかかった。

でもやっぱりそれも、ワイミーズハウスの皆が同じだと思う。

抱っこなんてされたことない子だって、どこからＬのあったかさを感じ取っていたはずで、皆それに向かって生きてきているはずだから。

私がＬに抱っこされていたら、メロが横から「自分も」とすがっ

てきた。

私はしの腕を離れ、メロが次に抱かれた。
見上げたしは、はるか遠く、本当に高い所にいる人だった。

これがしを本気で目指し始めた時の話。
しを肌で感じた1度だけの想い出。

（後書き）

読み終わり、ムカついてしまった方、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5321c/>

熱

2010年10月10日00時04分発行